

インダス・プロジェクト ニュースレター

第5号

2009年6月30日発行

ごあいさつ

インダス・プロジェクトも、この4月で本研究（FR）3年目に入りました。この4月から遠藤仁さんが新しく研究支援員として赴任しました。遠藤さんは高校時代から考古学に関心を持つ考古少年だったそうです。世界各地で発掘を行ってきた実践考古学者で、本プロジェクトでインドでの発掘に従事していただいただけではなく、エジプトやシリアでも発掘の経験があり、またコンピューターにもつよい即戦力が期待される人材です。赴任早々、このニュースレターを担当していただいています。

ニュースレターはプロジェクトメンバーからの投稿になっています。今回は昨年度の研究活動報告を寄せていただきました。なかには、論文のような力作を寄せてくださった方もいますが、ニュースレターは基本的に活動報告を自由闊達に書いていただければ幸いです。

今回特筆すべきは、長年エジプトの発掘に携わっておられる近畿大学の高宮さんにご投稿いただいたことです。随所にエジプト文明との比較が述べられていますが、かなりその違いに興味を持たれたようです。ミニチュア嗜好のインダスと大きな物好き嗜好のエジプトを比較されているのに、「なるほど」とうなずかされました。エジプト、メソポタミアとインダスとの比較なども今後は視野に入れてプロジェクトを進めていきたいと考えています。

プロジェクトの活動としては大きなイベントがありました。5月29日には発掘報告会を、続いて30・31日は佐藤プロ、ハーヴァード大学との共催でラウンドテーブルを開催しました。多数の方にご参加いただき、ありがとうございました。

なお、インドの2カ所での発掘は昨年度で終了いたしました。本年度からは発掘報告書作成に向けて、分析に重点をおいて研究を続けていきます。本年度は古環境

復元研究グループのネパール、ララ湖での湖沼コア採集が行われます。その分析結果は本プロジェクトの行方を握っていると言っても決して過言ではありません。乞うご期待。

プロジェクトリーダー
長田俊樹

シャー・アブドゥル・ラティーフ大学との MoU 締結のお知らせ

インダス・プロジェクトではパキスタンのシンド地方での考古学調査を実施するために、パキスタンのシャー・アブドゥル・ラティーフ（SAL）大学のQ.H. マッラー（Mallah）博士を2007年4月から9月までの5ヶ月間、招へい外国人研究員として招き、共同研究を進めてきました。また、SAL大学はシンド地方で踏査や発掘などの考古学調査を精緻に進めており、その成果の一部はOccasional Paper 誌上でマッラー博士にご報告いただいています。

そこで、本プロジェクトではパキスタンでの調査をさらに進展させるために、6月5日にSAL大学との間



シャー・アブドゥル・ラティーフ大学との MoU 締結



N. シェイフ博士の講演風景

で MoU（研究協力に関する覚書）を締結いたしました。SAL 大学からは学長のニローファー・シェイフ（Nilofer Shaikh）博士と同大学教授のマッラー博士が来日されました。MoU 締結後には、シェイフ博士に同大学が発掘調査を実施しているインダス文明の都市遺跡ラーカンジョダロ（Lakhanjodaro）の発掘について講演していただきました。また、併せてウィスコンシン大学の J.M. ケノイヤー（Kenoyer）教授にもインダス文明のユニコーンについて発表していただきました。

今回の MoU 締結により、SAL 大学とのパキスタンにおけるより一層の調査連携が可能となりました。今後の調査成果にご注目ください。（遠藤 仁）

インダス文明の遺跡を訪ねて

高宮いづみ（近畿大学）

■はじめに

2009年3月末（3月22日～29日）に、インダス・プロジェクトの一環として、インド北部のインダス文明の遺跡を訪問する機会を頂いた。筆者は古代エジプト、特に初期国家形成期と王朝時代初期の社会組織を専門とする研究者で、都市や専門化の発達等の初期国家に関連するシンポジウムなどでは、しばしばインドを含む他地域の文明をご専門とする研究者の方々に混じって古代エジプトについて述べる機会があったものの、自ら地域の壁を乗り越えて文明間の比較を行えるほど、他の古代文明について直接的な知見はなかった。

今回インダス文明の遺跡を発掘調査中に訪れるという貴重なチャンスを頂いて、インダス文明に肌で接することができ、このニュースレターで無謀にも体当たりの・

体感的文明比較を試みることにした。というのも、学術的な文明比較の書籍は既に多数出版されているし、インダス文明がご専門の方々にとっては、今さらインダス文明のことを説明するのも僭越であると思われるからである。そこで下記の論考において、体感に関連する時間的・空間的サイズあるいはスケールに、少しだけこだわってみることにした。

実際にインドを訪ねてみたところ、毎年調査のためにエジプトに出かけ、古代エジプト文明に焦点を絞って研究していると、いつしかそれが当たり前のように感じるようになってしまっていたことに気が付かされた。つまり古代文明研究に対する客観的な感度がだいぶ鈍っていたわけで、今回のインド訪問で別の古代文明と現代社会を見聞したことによって得たものはたいへん大きかった。

今回見学したのは、デリーの国立博物館、ハリヤーナー州のファルマーナー遺跡、ラージャスターン州のカーリーバンガン遺跡（訪問順）であった。ここで、インド訪問の機会をくださった長田俊樹さん、任務を帯びた渡航への筆者の同行を嫌がらず、いろいろご教示くださった宇野隆夫さん、発掘調査中の遺跡をご案内くださったデカン大学のシンデ先生をはじめとして、現地や日本でお世話くださいましたインダス・プロジェクト関係者の皆様に、記して感謝いたします。

■時間軸

本稿では筆者の専門性から、どうしてもインダス文明について古代エジプトとの比較の観点から見ることになる。そこで、まずは古代エジプトの歴史の概要を述べておきたい。

エジプトでは前3000年頃に最初の統一王朝（第1王朝）が出現し、それ以降おおむね王が君臨する国家が約3千年にわたって継続した。統一王朝出現以前の「先王朝時代」（前4千年紀）に、社会階層の分化や専門化を含む社会の複雑化が急速に進行し、その後半に出現した有力な王国の中から、統一王朝の王が現れたのである。国家が成立した初期の段階は、「初期王朝時代」（前3000～2682年頃）と呼称され、官僚組織をはじめとする国家体制の萌芽期であった。それに続く「古王国時代」（前2682～2191年頃）に、王墓として巨大な石造ピラミッドが建造されるようになり、官僚組織も発達して、強力な中央集権国家体制が確立するとともに、古代エジプト文明は最初の頂点を迎えた。しかしその後の「第1中間期」（前2191～2025年頃）には、中央集権体制が崩壊し、エジプト各地を地方領主たちが分断支



写真1 ハリヤーナー州の麦畑



写真2 ナイル河の風景（テーベ西岸）

配する時代が訪れた。その後エジプトでは、何度か栄枯盛衰を繰り返しながら、前30年にローマ帝国の属州となるまで、古代国家が継続したのである。

インダス文明は、前3千年紀中葉に成立し、前3千年紀後葉まで継続したので、絶対年代としては古代エジプトの「古王国時代」とほぼ同時期である。他方、文明の形成・発展の尺度からすると、その間に、古代エジプトにおける先王朝時代末期（この頃、エジプトは文化的に統一され、都市や文字が出現した）、初期王朝時代、古王国時代のプロセスが含まれるかもしれない。初期王朝時代と古王国時代を合わせると約800年間であり、インダス文明の期間と大きく違わないが、先王朝時代末期まで合わせると1000年間余りで、エジプトの方が類似のプロセスに長い時間がかかったことになる。

本稿では、インダス文明と古代エジプトの主に「古王国時代」を比較してみたい。上述のように、エジプトの古王国時代には王墓として巨大なピラミッドが建造されており、石材を用いた建造技術が高度に発達していた。また当時の王は、唯一神々と人間の間をつなぐ神聖な存在として特別視され、その下に堅固で複雑な社会階層と官僚組織が形成されていた。

改めてインダス文明と比較してみると、古代エジプトの特徴の一つは、前3200年頃に文字が使われ始め、第1王朝以降は君臨した王の名前がおおむね知られていて、歴史が王の業績と政治史を中心軸として語られることである。実際に各王の葬祭記念建造物が考古学的遺構として検出されているため、考古学的資料もおおよそ王統譜に沿って論じることができる。他方インダス文明では、文字の使用は認められているものの、古代エジプトのような文字資料に基づく編年や歴史・文化の解釈は進んでおらず、考古学的資料が文明と歴史理解のための主要資料となっている。エジプト学の中でも考古学を専門とする筆者にとって、もしも古代エジプトに文字がな

く、考古学的資料からのみ歴史を考えたらどうなるのだろうか、と空想してみることもまたたいへん有益であった。

■環境と生業

テリーを車で離れてハリヤーナー州の田園地帯に入ったとき、まずは遙か彼方まで広がる広大な耕作地と豊富な水に驚かされた。いったい、インダス文明が栄えた土地はどのくらい豊かなのだろうか（写真1）。

古代エジプトの主要生業は、ナイル河の沖積低地（氾濫原）で行われる麦栽培であった（写真2）。エジプトにおいて、ナイル河のデルタでは東西約200km、南北約150kmの広い地域で耕作が可能であるが、デルタより南方の河谷部では、可耕地はナイルに沿って長さ約800km、幅は最大でも約20kmの範囲に限られ、その外側は乾いた砂漠である。また麦栽培では、水源地帯の雨季に対応する夏場の増水の後（晩秋から初冬）に沖積低地に播種を行うため、古代には基本的に冬麦の一毛作であった。すなわちエジプトナイル河流域では、最大でも可耕地面積が31,000km²程度で、収穫は年1回であった。それに対してインダス文明では、ハリヤーナー州近辺だけでも耕作地面積がエジプトの2倍を遙かに凌ぐであろう。さらに現在のように、インダス文明期にも多毛作が可能であったのだろうか。もちろん単位面積あたりの麦の収穫量が大きく影響したことは確かであるが、ここに、インダス文明の途方もない潜在的なパワーを見た気がした。

上記のようなエジプトの耕作地状況は、年間を通じてほとんど降雨のないエジプトにおいて、農業用水をナイル河に依存していたために生じていた。毎年必ずナイル河の増水は起って氾濫原を潤したものの、年毎の増水位には変動があった。麦の収穫量はその年の増水位（すなわち流量）に大きく左右され、増水位が低い年には収



写真3 ファルマーナー遺跡の都市



写真4 カーリーバンガン遺跡

穫量が減じた。さらに、ナイル河の増水位には長期的な変動があって、初期王朝時代には比較的増水位が高かったが、古王国時代の間次第に増水位が低下し、古王国時代末から第1中間期にかけて低い増水位がしばしば飢饉を引き起こしたことが、古王国時代の中央集権体制が崩壊して、第1中間期に地方分断支配の時期が訪れた主要因の一つであると考えられている。すなわちエジプトでは、長期的なナイル河の増水位変動が文明の盛衰を左右してきたと推測されている。その後、中王国時代（前2191年～）以降にも、エジプトは何度か繁栄と衰退を繰り返すが、これにはやはり増水位の長期的変動が影響したことが多かったという説が有力である。

インダス文明の終焉には環境変化が大きな影響を与えていた可能性が推測されているが、古代エジプトでは、ナイル河増水時の流量の自然復活もしくは流量の変動への人間側の対応によって、何度か崩れかけた国家システムを建て直してきた。ナイル河の環境は、比較的長期的に安定していたと言えるかもしれない。また、現在の研究者が一応古代エジプト文明の終わりとして設定している前30年は、王が支配するエジプト独立王朝の終わりという政治システムの終焉であって、生業システムや生活文化の急激な変化を伴ったわけではなかった。考古学的資料や物質文化のみから見ると、おそらく文明はそれから継続しているように見えるであろう。

■ 集落

ハリヤーナー州ロークタク県に位置するファルマーナー遺跡では、発掘調査中の集落址と墓地区を見学させて頂くことができた。ファルマーナー遺跡の集落は、インダス文明後期の比較的小規模な集落であるという。のどかな田園の一角で検出された集落址は、現代の周辺村落と比べても、整然とした直線と矩形を基本とする都市的なプランが印象的であった。建材は日乾レンガと焼成レン

ガを使い分けており、日乾レンガを主体とする矩形の建造物の雰囲気は、エジプトとも共通していてなじみ深い感じがした（写真3）。

さて、日乾レンガを主要建材とする集落を念頭に置いて改めて古代エジプトを振り返ってみると、日乾レンガの使用開始は先王朝時代の前3500年頃に遡る。日乾レンガ使用以前の住居は木材・植物の葉や泥で造られ、矩形の他に、円形もしくは隅丸方形のプランがしばしば認められた。すなわち、日乾レンガの使用が、矩形プランの住居と集落の出現に密接に関わっていたらしい。日乾レンガを建材とした矩形建造物群から成る集落は、いくつかの遺跡で前3200年頃には出現した。そして初期王朝時代と古王国時代には、周壁で囲まれた集落が形成されていたが、古王国時代の周壁の形態は楕円形（もしくは不整形）と矩形に大別される。従来の知見によれば、楕円形の周壁を持つ集落は自然発生的であるのに対して、矩形の周壁を持つ集落は王や国家の影響を受けて計画的に設立された可能性が高いという。

矩形の周壁で囲まれた国家が主導して建造したと考えられる集落（都市と呼んでも良い）の例が、エジプト各地で検出されている。古王国時代の例は多くはないが、ピラミッドに伴い神官や葬祭管理者たちが居住したと考えられる「葬祭集落」がいくつか知られている。また中王国時代（前2025-1794年頃）には、葬祭集落の他に、防衛を目的とした「城塞集落」や貴重鉱物を採掘するための「採石集落」の例があった。これらの集落は、いずれも一般民衆が居住する通常の集落ではなく、国家機能の一部を担う特殊な目的を持って建造されたことが特徴である。それに対してインダス文明の都市は、計画性を窺わせる矩形の周壁の中に一般民衆も含めた人々が居住していた点が対照的で、その成立のメカニズムに大きな違いが認められた。このように、文明における都市の機能はインダス文明と古代エジプト文明ではだいぶ異なっ



写真5 ギザの大スフィンクスと大ピラミッド



写真7 エジプト新王国時代ラメセス2世の巨像

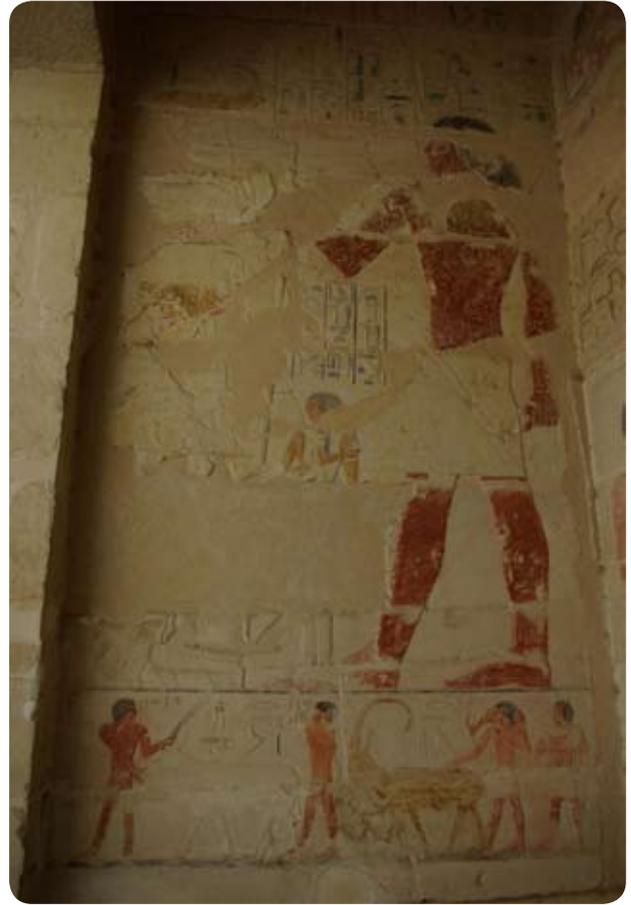


写真6 エジプト古王国時代の墓室壁画

ており、古代エジプトにおける緊密に国家と結びついた都市の様相の方が、古代文明の中では特異なのかもしれない。

次に、早朝にロータク県を離れてカーリーバンガン遺跡に向かったが、途中で通行の特別許可を取得するために、警察署で2時間余り足止めされた。ちょうどパキスタンとの関係が緊張していた時期に当たっており、インドも隣国との難しい関係を抱えている現状を思い起こした。

そのおかげでようやくカーリーバンガン遺跡に到着したのは、夕刻であった(写真4)。発掘調査が行われてから長期間経っているため、書籍で見っていた発掘調査直後の写真の印象と具体的な都市のプランを地表面から見極めるのは難しかったが、「ここがあのカーリーバンガンか」と思うと、行き着いただけでも感激である。カーリーバンガンに小山状に残る厚い集落堆積と散乱する無数の遺物は、インダス文明の活気を想起させるに十分であった。

カーリーバンガン遺跡における第Ⅱ期の都市の規模は、城塞部が240×120m、市街地が240×360m、合計約115,200㎡である。エジプトでは沖積低地内に大半の集落が埋もれていて、古王国時代の都市が発掘され

た例はほとんどないため、有効な比較資料がない。強いて言えば、エジプト南縁部の地方都市エレファンティネは規模が30,000㎡余り、ヒエラコンポリスの都市は200×300mの60,000㎡である。当時の首都であったエジプト北部メンフィス近郊では、これよりはるかに大きな王都が築かれていたことは確実であるが、人口の多くはむしろ小規模な村落に分散していた可能性が高いと考えられている。都市への人口集中の度合いにも、インダス文明と古代エジプト文明の違いが認められるようであった。

少数ながらもインダス文明の遺跡を訪れて、改めて古代エジプトは「石の文明」であることを実感させられた。エジプトのナイル河流域は岩盤が石灰岩と砂岩から成っており、石材の調達は容易であった。そのために、住居に石材が用いられたことは稀であったものの、古王国時代から墓の建材には石材が用いられるようになり、神殿の建材としても使われ始めた。そのお陰でピラミッドのような巨石建造物が築かれ(写真5)、建造技術や組織も発達し、さらには壁面の浮き彫り(写真6)や石製工芸品(写真7)も発達したわけである。これも環境と文明の相互作用の例であった。



写真8 ミセス・ファルマーナー

■埋葬

ファルマーナー遺跡において、同遺跡発掘調査の隊長であるシンデ先生が、ご親切にも自ら集落址から少し離れた場所で検出された墓地を案内してくださった。耕作地の一角で検出された墓のいくつかには、ほとんどそのまま残存良好な人骨が横たわっていた。ここで、インダス文明を営んだ人に直接会えたわけで、たいへん貴重な体験であった。

実のところ筆者は、25年ほど前に調査のために東京からエジプトに向かう機上で、デリーから乗り合わせた神秘的なほど美しいインド人の女性を見てから、インド女性の隠れた信奉者になっていた。その女性はすらりとした姿態に半透明のサリーを纏い、3才くらいの子供を抱いていたのを覚えている。墓から検出されたうちの1体は、まさにそれを彷彿とさせるほっそりとした姿態と気品を備えた女性であった(写真8)。思わずシンデ先生にその女性の名前を尋ねたところ、「ミセス・ファルマーナー」とのお答えを頂いた。

シンデ先生によれば、この墓地における埋葬は1次埋葬、2次埋葬、象徴的埋葬の3種類に分けられると言う。その埋葬の違いが社会階層をあまり反映していないらしいことに新鮮さを感じた。というのは、古代エジプトの埋葬には、かなり画一的な葬祭概念と共に、被葬者の社会階層が色濃く反映されるのが常であったからである。

古代エジプトでは、人々は来世があることを信じており、現世における肉体が死滅した後も、来世(別の次元)で自らの存在が復活し、永久に存在し続けると考えていた。たいへん人々は自らが持てる経済力をめいっぱい利用して、来世での復活の条件である立派な墓を築き、肉体を保存して、相応の副葬品を埋納したため、埋葬に社会階層が現れることになった。そして、王は死後に冥界の支配者であるオシリス神と合一すると信じられていた



写真9 エジプト古王国時代の石造墓

ので、古王国時代のピラミッドのような巨大王墓の建造も可能になったのであった。

したがって古代エジプトの埋葬(特に官僚層の埋葬)には、墓主の生前の社会階層や身分がくっきりと現れる反面、その他の側面は見極めにくい。ちなみに、古王国時代最大の王墓であるギザに築かれたクフ王のピラミッドの規模は、一辺約250m、高さ約150mである。また、高官たちの墓も、しばしばピラミッドと同じように石材で建造されていて、大型のものは一辺が数十メートルを超えた(写真9)。この頃の最小の墓は、屈葬にした遺体を納める最小限の1×1m程度であったことを考えると、平面積を比べても、王の墓は最小の墓の10万倍以上であった。王や官僚の墓は上部構造を持っており、最小の墓は土壌墓だったので、堆積を比べるともっと差が大きいことになる。さらに、官僚墓は、壁面が精巧な浮き彫りで飾られ、豊富な副葬品が納められていた。

しかしながら、インダス文明における葬制は全く異なる葬送概念に基づいて行われていたらしく、ファルマーナー遺跡で発掘された墓はいずれも2×1m程度の規模であった。墓の規模から言えば、おそらくは古代エジプトの職人階層や一般民衆の墓に近いと思われた。死後の世界に関する概念という精神的要素が、葬制や文明に与える影響の大きさを再認識する機会になった。

■遺物

インダス文明の遺物を見る機会は過去にも日本で開催された展示会等で何度かあったが、今回国立博物館に展示された豊富な遺物に接する機会を得た。そこで改めて感じたのは、製作物のサイズの問題である。やはり、インダス文明の遺物は、小さくて細かった。そして、それなりにたいへん愛らしかった。それに比べると、古代エジプト人は大きい物好きと言えるであろう。

例えば彫像を見ると、古代エジプト文明においては、

統一王朝成立以前から等身大より大型の神像が出現しており、古王国時代には小型の人物像に混じって、多数の等身大人物像が製作された。また工芸品においても、先王朝時代末から実用品より大きなサイズの棍棒頭や化粧板が作られており、古王国時代には、家具や装身具などの実用品（すなわち等身大・実物大）の装飾が発達していた。古代エジプトでも常に小さな工芸品は製作されたが、全体としてミニチュア嗜好はインダス文明の特徴であるように思われた。

古代エジプトにおける大きい物好きの嗜好は、権威の表現と密接に関わっていたと思われる。初期王朝時代から浮き彫りにおいて、古代エジプト人は人物の偉大さを表現するために、図像の大きさを用いていた。例えば壁画の同じ場面で、王を他の人物よりも大きく描くことによって、存在的な偉大さを表現することになっていた。古王国時代のピラミッドやギザの大スフィンクスにその著しい傾向が萌芽的に認められ、やがて新王国時代になると高さが10mを越える巨大な王像が盛んに製作されるようになった。

■おわりに

文明比較の動機は、おそらくなぜ地球上の地理的あるいは時期的に離れた地域に似たような現象が生じたのだろうかという疑問に発しているであろう。実際、文明の特徴としてしばしば指摘される都市の存在、文字の使用、長距離交易の存在などは、インダス文明と古代エジプト文明に共通している。さらに両者の間には、主要作物である麦、牛・羊・山羊の家畜、日乾レンガ建材、印章などが共通しており、こうした共通点の一部がメソポタミア文明との接触に由来する可能性を示唆する。

他方、古代エジプトでは集落、埋葬、製作物の至る所に現れる国家や社会階層の存在感が、インダス文明には希薄であることも実感することができた。物質文化や考古学的資料に希薄な痕跡しか残さない国家や社会階層が存在し得たのであろうか、あるいは国家や社会階層なくして多数の文明の特徴を備えた文明が誕生し得たのであろうか。

古代エジプト文明は、文字に加えて豊富な図像資料があるために、そして王や国家が存在したために比較的分かりやすい文明なのかもしれない。今回の訪問の結果、それとは異なるシステムを持つらしいインダス文明にいつそう興味を引かれることになった。

南インドにおけるエンマー小麦の栽培分布に関するノート

千葉 一（東北学院大学）

2008年9月10日から10月10日までの1ヶ月と、今年1月24日から3月10日までの1ヶ月半（内2～3月にかけての半月間、グジャラート州のカーンメール遺跡発掘調査キャンプに合流）の2回渡印し、伝統的な栽培植物の分布や利用法などを調査しました。特に、①タミルナード州西部山岳地帯に島の様にとり残されている観のあるエンマー小麦（以後EW）の栽培が、どのような地理的広がりを示すのかと言う点。②デカンの栽培植物がその伝統や特に信仰とどのような関係にあるのかと言う点。この2つを目的としました。しかし今回は、野帳のごく一部を簡単に提示して①にいて管見などを述べ、②については次回に譲りたいと思います。

まず08年の調査で得たEWに関する情報を、以下にごく簡単に示します。インフォーマント名は割愛しく日時：場所：現状や聴き取り・実見内容：その他の情報>の順で箇条書きにしてみます。

- 2008年カルナータカ州とタミルナード州での調査
- 9/13：マイソール県 H.D.Kote：jave goodi (EW) の uppiTTu（粗挽き固粥）実食：材料のEWの nuccu（ザラメ状に砕いた穀）はマイソール市で購入
- 9/15：チットゥラドゥルガ県 Rampura：10年程前迄生産：近村 Venkatapura での生産と、主要産地ビーダル、グルバルガ、ビジャプールの北部3県を示唆
- 9/15：バツラーリ県 Gudekote：20年程前迄生産：「hooLige（薄でのお焼き）や paayasa（甘い粥）等の儀礼食を作った」、近村 Mahadevapura では現在も栽培
- 9/20：バツラーリ県 Kamalapur：「jave goodi (EW) から uMDi（粗糖で固めた玉菓子）や hooLige 等の儀礼食、capaati も作った」：現在は普通小麦を使用
- 9/22：ダワンゲレ県 Hosakere：buDDe goodi (EW) を最近まで栽培：近村 Gauripura、Kankanalu での生産を示唆
- 9/22：ダワンゲレ県 Jagaluru：「祭や結婚式の儀礼食 maadali を jave goodi (EW) から作った」：近村 Jamapura での生産と、主要産地ビーダル、グルバルガ、ビジャプールの、ダールワードの北部4県を示唆
- 9/22：チットゥラドゥルガ県 Chitradurga：15年前



写真1 タバコの葉を運ぶの農民、マイソール県フンスール近郊



写真3 EWの uppiTTu (粗挽き固粥)、マイソール県 H.D. コーテ



写真2 beTTada nallikaayi (山スグリ) の蜂蜜漬け、マイソール県 H.D. コーテ



写真4 神棚に稲の「穂掛け」、コダグ県クシャルナガル

まで Pandralli 村で EW を生産:「播種時期に雨が必要、後は放って置く」天水による栽培

9/29: マイソール市 Devaraja 市場: EW は消え bansi (マカロニ小麦) が目立つ: 2001 年に大田正次先生が訪れ EW を確認

9/29: マイソール市 Devaraja 市場向い食料品店 Mohan Bhandar: EW (穀粒と nuccu) の 1kg 袋詰めを実見:「EW はマディヤ・ブラデシュ州やグジャラート州産」と

9/30: バンガロール市シティ・マーケット Nataraja Store: EW の nuccu (ザラメ状に砕いた穀) の 1kg 袋詰めを実見: マカロニ小麦とそれを原料とす shaavige (極細スパゲティ) が目立つ。穀物商街では 2 店のみが EW を販売、「グジャラート州産」と

10/1: タミルナード州セーラム県 Senkaud (シュヴェロイ山塊西部): 現金収入に繋がらない samba goodi (EW) の作付を 10 年程前から減らしコーヒー農園での労働へ:「poMgalu は EW の収穫祭だ」と

10/3: セーラム県 Vellimalai (カルライン丘陵): 村の

金曜市で EW は確認できず:「奥の Yeluthuru 村にエンマーがある」との情報

10/5: カルナータカ州トゥンクール県 I.D.Halli: 2 軒の家が持ち寄った buDDa goodhamulu (EW) の小穂を実見:5 年程前までは多くの家が EW を作り、「小麦料理のすべてに EW を使っていた」と

2007 年 9 月 30 日に、ニルギリ山中のチンナクンヌール村で EW の小穂を見せてくれた baDaga 族の人々は、イスラム勢力からの迫害を逃れ、北のマイソール地方から移住して来た人々の末裔とされています (ニュースレター第 2 号: 2007 年 11 月 30 日発行)。彼らは shiva 派の信仰も持ち、そして中には liMgaayata (カルナータカ州のドミナント・カーストの一つ) が数家族いることにも驚かされました。そうしたカルナータカとのただならぬ関係から、ニルギリの baDaga に繋がる EW の線、或いは点をマイソール県に確認できないものかと思いました。

熱帯モンスーン気候の影響が弱まる西ガーツ東麓は、



写真5 タケノコの塩漬け、写真はウツタル・カンナダ県ダルマスタラ近郊でのもの



写真8 米俵、ダクシナ・カンナダ県ダルマスタラ近郊 (08年)



写真6 maMjeNabeと呼ばれる白いキノコ、コダグ県アーネチャウクール



写真7 キノコ、マイソール県 H.D. コーテの定期市 (06年)



写真9 米俵、ウツタル・カンナダ県 goMDa 族の村バトゥカル (01年)



写真10 「グジャラート産」とされるEWのヌッチュ（ザラメ）

サバナ的でかつ高地性の気候も相まう地域です。南インドにしては小麦栽培に比較的適しているように思われ、EWを尋ねマイソール市から40km余り西のフンスールへと向かいました。しかしEWに関する返答は否定的なものばかりでした。めげる事なく、そのままニルギリ山塊に迫るように30kmほど南下し、H.D. コーテへ。その途上、しきりに目にしたものは、近年生産量が急増していると言われるタバコとトウモロコシの畑でした（写真1）。商品作物と伝統作物とのスイッチ関係をおいつつH.D. コーテに着き、この日お世話になるナンジュンダイヤさん宅で朝食をとる事にしました。いつものように台所を覗かせて頂くと、girijana（山の民）の代表的な伝統食「beTTada nallikaayi（山スグリ）の蜂蜜漬け」を発見（写真2）。それにしゃぶりつく私の横で、奥さんは朝食の uppiTTu（粗挽きの固粥）を準備していましたが、なんと鍋の中で掻き混ぜていたのはEWのザラメでした。

その uppiTTu は、パン小麦の rava（粗挽き粉）を使ったモチモチタイプのものとは、味も食感も異なり別の料理のようにさえ思われました（写真3）。使っていた材料は、rava よりも粗い nuccu と呼ばれるザラメ状に砕かれたEWでした。タバコとトウモロコシで食傷ぎみだった気分は一気に晴れ、uppiTTu を食べ過ぎてしまいました。しかしここには、EWを食べる人達はいても、それを栽培する人達はいないとの事でした。この uppiTTu が、ニルギリの baDaga のEWに連なる線上の一つの痕跡か否かは判然としません。

フンスールから西北西へ50kmほどのコダグ県クシャルナガルは、西ガーツの male naaDu（森の国）への登り口にあたります。モンスーンの風下山麓のため小麦栽培の可能性を期待しましたが、商店街を歩いてみると、どこの店の看板も総て多様な女神の名を冠したも



写真11 EWの小穂、トゥンクール県I.D. ハッリ

のばかりで、帳場の壁の神棚の女神様には、決まって稲の「穂掛け」がされていました（写真4）。開発によって森を追われた girijana（山の民）を支援しているデイヴィッド・ロイさん宅で食事のお世話をいただきました。その台所には「筍の塩漬け」の瓶がありました（写真5）。マレナードでは、しばしば見かける保存食です。また本来、蜂蜜採集や象使いの伝統を持つ jeenu kuruba の居留地アーネチャウクールを訪れた際には、小さな白いキノコ maMjeNabe に出会えました。インドで野生の食用キノコを実見したのは、H.D. コーテの定期市（2006年）と今回で二度目です（写真6,7）。この他マレナードでは、稲俵も比較的容易に確認できたりもします（写真8,9）。このように西ガーツ東山麓は、西山麓と比べ降水量が劇的に減少するものの、小麦と言うよりはやはり稲作や照葉樹林文化にも似た要素が存在する地域です。結局このクシャルナガルの地でEWを確認する事は出来ませんでした。

クシャルナガルの郊外に出ると、タバコとトウモロコシの突出が目につきました。聞けば、「それらの作付増によって navaNe（アワ）と jooLa（モロコシ）が消えた」と。そう教えてくれたラニゲトゥ村のハイパイヤさんの家の後ろには、raagi（シコクビエ）がヒツソリと栽培されていました。ガイドをしてくれたデイヴィッド・ロイさんは、「以前は saamai（雑穀の一種）もあった。しかし州政府は高収量品種や売れる物を奨励するため、雑穀が栽培されなくなってきている。しかしハイブリットなどの栽培には金がかかる事もあるし、借金をせざるを得ない者もいる」と。パン小麦やマカロニ小麦に比べ、難脱穀性や硬質のため収穫から口に入るまでに手間がかかるEWは、商品作物としては不向きな性質を持っています。雑穀を中心としたサバナ農耕の冬作としてのEWが、サーマイに先行してこの地域から駆逐されたと、

推察する事もできるかも知れません。

baDaga との関係が深いマイソール県を含む南部カルナータカは、米、シコクビエ、サトウキビなどの生産が盛んで、乾燥するデカンでも比較的湿潤な地域です。また先にも述べたように西ガーツ東山麓は、西山麓と比較してモンスーンが勢いを弱める一帯です。しかしそうした EW (年間降水量 600 ~ 800mm) に対して比較的好適な降水の地域よりも、乾燥するデカン高原中央部により近い中部カルナータカ東半(チットウラドゥルガ、バツラーリ、ダワンゲレの 3 県) から、EW に関する具体的に信頼度の高い情報が出て来た事は驚きでした。この地域の EW 生産者は、それを商品としてではなく自家消費作物として、或いは儀礼食に必須なものとして栽培している様でした。また彼らは口々に、主要生産地としてビーダル、グルバルガ、ビジャプールなど北部カルナータカ諸県を示唆しました。

この北部カルナータカ諸県が EW ベルトを構成し、インドにおける EW 流通の一大拠点を形成していると、内心確信しました。その裏を取ろうとした、マイソールとバンガロールのマーケットで得た情報は、かなり意外なものでした。マイソールの食料品店 Mohan Bhandar の主人は、「EW はマディヤ・プラデシュやグジャラート州からやって来る」と答え、またバンガロールの穀物商は 2 店とも「グジャラート産」と答えました (写真 10)。想定していた北部カルナータカ EW ベルトを遥かに越え、主要栽培地域の問題は、一気に北インドと西インドに拡散してしまいました。

思い起こせば 2007 年 9 月 29 日、ニルギリ山塊の標高 2,300m 高地避暑都市ウーティーの市場で初めて EW に出会った時、店の売り子は「パンジャープ産」と答えていました (ニュースレター第 2 号: 2007 年 11 月 30 日発行)。「緑の革命で在来品種がいち早く駆逐されたと聞くパンジャープ? そんなバカな!」と思い、間髪入れず否定した自分を恥ずかしく思います。もしこれら 3 件の情報が事実だとしたら、インドは「世界のエンマー小麦大国」ということになるのではないのでしょうか。二粒系小麦の中でも最も原始的とされる EW が、何故インドに太古から現在に至るまで、それも広範な地域に保持され続けているのだろうか? という疑問を禁じえません。そんな宿題を抱えつつ、調査はタミルナードのシュヴェロイ山塊へと向かいました。

高温のタミルナードにおける EW の栽培は、高冷地栽培にある程度限定できるかも知れません。西ガーツのニルギリ山塊同様、東ガーツのシュヴェロイ山塊西部の高地避暑地イェルカウドウの近村センカウドウで

samba goodi(EW) の栽培が確認できました。EW の小穂を保持している農民達は皆、コーヒー農園に働きに出ていて不在だったため実見は適いませんでした。村ではサーマイ、シコクビエ、tenai (アワ) が少し栽培されていると聞きます。それらも EW と同様、コーヒーを筆頭としたガヴァ、胡椒、カマラオレンジ (温州ミカンに似ている)、プランテイン (調理用バナナ) などの商品作物へと比重が移って来ている様でした。しかし伝統的な諸需要が、農民たちに細々とですが EW の栽培を続けさせているようも感じました。

日本で言えば、小正月の小豆粥に相当するタミルの poMgalu。これまで、そのメイン素材を米と認識して来ました。幾度か口にすることがある儀礼食としての甘い poMgalu 粥の総てに、その例外はありませんでした。しかし一人の村人が「poMgalu は samba goodi(EW) の収穫祭だ」といった言葉に、米に偏重してきた自分のバイアスを指摘された思いでした。同時に、彼らが親から子へと大切に伝えて来た「EW に込めた魂の再生の願い」とも言うべきものも感じたように思います。

インダス文明の遺跡が点在するパンジャープやグジャラート州に、4500 年の時を超えて EW が栽培されている?。それも確かに感動的です。また一方で、遠くはなれた半島突端やその山岳部に EW がひっそりと息づいてもいる。そうした辺境感漂う半島突端や山岳部における古層の堆積には、EW に適した気候的なシェルターとしての意味と、民族間の関係や移動と言った一種政治的なシェルターの意味もあるのかも知れません。その視点に立てば、半島南部におけるドゥラヴィダ語族の堆積と EW の点的重複は、「マディヤ・プラデシュ産 EW」を理解する助けにもなり得ます。

インドを南北に分けるヴィンディヤ山脈は、少数民族の宝庫とされる雲南にも連なる地域で、指定部族も比較的高い比率で存在しています。マディヤ・プラデシュ州は、その中にすっぽりと納まります。アーリヤ進入以前の諸民族が、原始的な EW と共にヴィンディヤ山脈のマディヤ・プラデシュに堆積していると、理解する事もできます。そして現在そこには、EW を商品作物として栽培している人々がいる?。2007 年にニルギリのヴァイス・カンパニーで EW の rava (粗挽き全粒粉: 加工地はニルギリ南麓の工業都市コインバトル) の袋詰めを手に入れました。その時、タミルの何処かに商品出荷する程の生産地が潜んでいるかもしれない (ニュースレター第 2 号: 2007 年 11 月 30 日発行) と思いました。そんな一縷の望みを胸にシュヴェロイの森を巡り、ヴィンディヤの森とのパラレルな推移性も巡らしもしま



図1 07-09年の調査で把握したEWの栽培分布

した。しかし商品作物としてのEWどころか、シュヴェロイ山塊東部でEWに出会う事は出来ませんでした。私達に残された時間は、あと2日となりました。

EWが確実に存在していると思われるチットゥラドゥルガ県ヴェンカタプーラ村までは、約600km。しかし帰国フライトを考慮すれば、残された展開はバンガロール近隣県に絞られました。そして浮上したのが、バンガロールの北西に位置するトゥンクール県でした。EW情報が集中するチットゥラドゥルガやバツラーリ県と、かなり類似した地域に思われたからです。早速「ダメモト」で押しかけた友人の村で、私達は今回始めてEWの小穂に出会うことが出来ました(写真11)。アンドゥラ・プラデシュ州に近く、テルグ語が話されているその村の名は、iTaka dibbana haLLi(「レンガの丘の村」、通称I.D.ハッリ)。20年ぶりの訪問でした。

この日EWの小穂を見せてくれた2人は、アンドゥラ地方に典型的に見られる支配的カーストreDDiでした。I.D.ハッリはカルナータカにあって、reDDiカーストが支配的な村です。この事は栽培分布に関して、アンドゥラ・プラデシュ州がその対象に入り得ることを示唆しているかも知れません。J.PercivalのThe Wheat Plant(1921)では、旧ハイデラバード州はEW栽培地



写真12 EWの青い穂とサンプル、トゥンクール県I.D.ハッリ



写真13 EWのpaayasa(ミルク粥)、バンガロールで友人の奥さんが再現

域には入っていないようです。しかし2007年の調査で、タミルナードのダルマプリ市(バンガロールの南東約100km)のスーパーで見つけたEWのravaの袋詰めに対し、店員は「アンドゥラ産だ」と返答しました。reDDiが保持するEWは、その時の言葉を裏付けているようにも思われます。アンドゥラ・プラデシュ州のプレゼンスは、これまで考えられて来た以上に高いのではないのでしょうか。

友人のK.スリニワサ・レッティによれば、「以前は多くの家でbuDDa goodhamulu(EW)を作っていたし、パン小麦を使う料理のすべてに、以前はEWを使っていた」と。ガネーシャ・チャトルティの儀礼食karikaDabu(餃子型の揚げ菓子)、祭などの際に作られるsajjige(玉菓子)・hooLige(薄でのお焼き)・paayasa(甘いミルク粥)、勿論、日常食のuppiTTuやpuuriにcapaati、スナック的なkajjaaya(ドーナツ)、タコ焼き型のguMtapamganalu(タミル語でパニヤラム、カンナダ語でappaM:カルナータカでは米とケツルアズキの発酵シトギで作られるのが普通)、shaavige



写真 14 女性達による EW の収穫風景、チットゥラドゥルガ県
ウェンカタプール



写真 15 EW の doose (未発酵クレープ)、バツラーリ県コッ
トゥールで友人の奥さんが再現



写真 16 畑の真ん中にある先祖の墓の前で、5人の既婚女性(す
べてリンガーヤータ・カースト)を歓待する模様、ビジャ
プール県ドーナール

(極細スパゲティ)…。そこには、製粉技術が発達した
後も人々がパン小麦へとは転換せず、素材としての EW
を大切に保持しながら創り上げて来た食文化が存在して
いたと思います。

タミル山岳部と同様、弱々しい EW の生産活動を南
部カルナータカの I.D. ハッリで確認する事になりました。
それは確かに矮小な点でしたが、2009 年の調査で
はかなり広範に EW の生産が点在していることを確認
できました。以下に、その実見例などを簡単に示します
(図 1 の栽培分布図)。

■ 2009 年カルナータカ州 (一部アンドゥラを含む)
での EW に関連する実見例

1/26: トゥンクール県 I.D.Halli: buDDa goodhamulu
(EW) の小さな畑 2 箇所を実見 (写真 12): 既に青
い穂を出しており、半月後に収穫予定

1/27: トゥンクール県 Cikkayalkur (I.D.Halli の南 5
km): エンマー畑を実見: 5 年ほど前まで、総ての家
が EW を栽培、現在は 1 軒だけ

1/27: トゥンクール県 I.D.Halli: EW の capaati と儀
礼食 sajjige の調理工程を実見・実食

1/28: トゥンクール県 CikkadaLLavaTa (I.D.Halli の
西へ 10km): 青い穂を出した EW 畑 (芥子と昆作)
を実見: 女神 cauDeeshvari に捧げ始食する
neyikaara (職布工)

1/30: バンガロール市: EW の uppiTTu と儀礼食
paayasa (写真 13) の調理工程を実見・実食:
Rajajinagar 地区の穀物商から購入した「SAMBA
WHEAT BROKENS」(nuccu= ザラメ) の袋詰 (加
工地コイン バトール) を使用

1/31: アンドゥラ・ブラデシュ州アナタプール県
Hindupur (I.D.Halli のほぼ東 20km) の穀物商 Shree
Geetha Store: EW の穀粒と rava (粗挽き粉) を実
見・購入: 穀粒 Rs.40/kg、rava Rs.60/kg、EW
はパン小麦の 2 倍近くの値段、穀物商数軒で「jave
goodi」でマカロニ小麦を指示する傾向

2/1: アンドゥラ・ブラデシュ州アナタプール県
Kalyanadurga 近郊: 「jave goodi と雑穀 korule
作っている」と言う農民に遭遇: jave goodi が EW
を指示するか否か未確認

2/2: チットゥラドゥルガ県 Rampura: EW の小穂を
実見: 東に 5km の Venkatapura (アンドゥラ・ブラ
デシュ州境に近接) 産

2/3: バツラーリ県 Kondapur: 約 5m×60m=300㎡
の EW 畑を実験: トゥンクール県で実見した畑より
規模大、わずかにエンバクの混入→伝統的に継承され
てきた EW を傍証

2/4: チットゥラドゥルガ県 Venkatapura: 女性に
限定された EW の収穫作業を実見 (写真 14): 収穫直



写真 17 「ジャヴェ・ゴードィ」の注文で出された大麦とそれに混入していたEW、バツラーリ県バツラーリ市



写真 18 テカン高原に分布するヴァーティソルという黒土、ビジャプールのドーナール



写真 19 EW の capaati と儀礼食 sajjige (ギーと粗糖を使った玉菓子)、トゥンクール県 I.D. ハッリ

前の防災儀礼 caraga、脱穀場でEW小穂の raashi(小山)に若水、mora(箕)を使った供饌…EWの収穫には諸儀礼が付随、実見は適わなかった。

- 2/5 : バツラーリ県 Mahadevapura : buDDe goodi(EW) 畑とマカロニ小麦畑を実見 : 収穫の早朝 caraga を撒く防災儀礼、自家消費のために栽培、村には4軒の栽培者
- 2/5 : バツラーリ県 Halasagara : buDDe goodi(EW) の畑を実見、横にはマカロニ小麦畑 : EW と jaagari から作る gaarige (?) という揚げ物、収穫早朝の防災儀礼 caraga
- 2/6 : バツラーリ県 Kotturu : EW の doose (未発酵のクレープ) と shaavige などの調理工程を実見、doose 実食 (写真 15) : アンドウラの Hindupur で購入したEWを使用、EWの hiTTu (全粒粉) → doose (ペーストは時間をおけば発酵)、EWの madaa (精白粉) + 胚芽 → shaavige
- 2/6 : バツラーリ県 Kotturu : EW 収穫時5人の既婚女性を歓待 (ビジャプールのドーナール)、2/13にビジャプールのドーナール村でモロコシ脱穀の際に同儀礼を実見 : 防災儀礼の caraga、麦刈りの人々 (男女) は5人の既婚女性の足に触れ namaskaara (敬礼) して刈入れ開始 (最初にその家の主婦が象徴的に麦を刈り、スタート)
- 2/7 : バツラーリ県 Upanayakanahalli : EW 畑を実見、横にはマカロニ小麦畑 : kuruba (シェパード) 多住村、その多くがEWを栽培
- 2/8 : バツラーリ県 Kencatanahalli : 道端のEW畑を実見 : 「Varadapura 村ではEWを量産」との情報
- 2/8 : バツラーリ (ダウングレ?) 県 Pinjarahegudar : 道端のEW畑を実見 : piMjaara (綿紡糸工) 多住村、現在その多くがイスラムに改宗
- 2/11 : ビジャプールのドーナール Mallikarjuna Banarotti : EW 畑を実見 : これまで見た中で最大の栽培面積、北上するに従い規模が拡大している印象
- 2/11 : ビジャプールのドーナール Basavanna Bagevadi : ビジャプールのドーナール市でEWを栽培する親戚から贈与されたというEW穀粒を実見 : 神棚にはマカロニ小麦などの「穂掛け」を実見
- 2/13 : ビジャプールのドーナール Donuru : 穀物の刈入れや脱穀に先行してなされる「五人の既婚女性への歓待」の儀礼を実見 (写真 16) : 刈入れと落穂拾いは女性の仕事、マカロニ小麦の落穂を拾う女性達を実見
- 3/7 : バツラーリ県 Ballari 市の穀物商 kaalva accayyana aMgaDi : 「jave goodi」と注文し「食べ



写真 20 穀象虫に塗れた EW の穀粒と小穂、アナンタプール県
ヒンドゥープール



写真 21 ビジャプール産の EW の穀粒、ビジャプール県バサワ
バゲワティ

る jave はない」と言われて出された大麦（「食べない jave」hooma の儀礼用）を実見

3/8：詳細に大麦を観察わずかに混入している EW の小穂（写真 17）→大麦と EW の混作？、「jave goodi」という言葉で地域によって EW、大麦、マカロニ小麦を指示？

I.D. ハッリから半径 10km 圏内の 3 村で EW 畑を確認できました。その生産はどれも貧弱なものでしたが、他の EW 栽培の情報から総合して、トゥンクール県内にはまだ自家消費のための小生産者が広範に存在していると思われまます。また、州境を越えた隣のアナンタプール県でも同様の事が言えるかもしれません。しかし畑の隅に追いやられる様にして栽培されている EW を実見して、トゥンクールの EW 栽培も時間の問題という印象を受けました。

EW の生産量の減少について、友人の K. スリニワサ・レッティは「昔と比べ雨が少ないため、buDDa

goodhamulu (EW) を作れない」と言います。確かに I.D. ハッリ周辺（その後、チットゥラドゥルガ、バツラーリ、ダヴァンゲレ諸県でも）で実見した EW 畑は総て、地下水の汲み上げに依存し、天水によるものは皆無でした。こうした降水量の減少というインパクトに加え、I.D. ハッリにおいても 5 年ほど前から唐辛子、トマト、トウモロコシ、ヒマワリ、ヒマなどへの転換が進み、またトゥンクール県は、巨大消費地バンガロールを控えた近郊農業地帯へと変貌しつつあるとも聞きます。それは場所によっては、200m 以上も掘り下げて得られた地下水なしには継続不可能な農業の姿であり、自家消費作物としての EW は、換金作物栽培との水をめぐる競合に曝されていると考えられます。

しかし競合は水だけではないようでした。「goodhamulu (EW) には黒土が向いている」という話を幾度か聞きました。デカンにおける EW の栽培は、天水とこの黒色土の保湿性に依存していたのかも知れません。その黒土の畑もまた換金作物に優先的に回され、EW の栽培は水・畑など生産手段・労働対象を失いつつある状況が窺えます（これまでその黒色土をデカン高原に分布するとされる玄武岩の崩壊土壌、黒色綿花土と理解していましたが、後に京都大学の三浦礼一さんから「乾くと深いひび割れが入るヴァーティソルという土」という教示を受けました（写真 18）。実際、前年に EW の小穂を見せてくれた 2 人の reDDi は今年作付を見送っていました。しかしそんな状況でも、I.D. ハッリではナーガブシャン・レッティさんの一軒だけが頑なに EW を毎年栽培し続け、儀礼食だけでなく capaati などの日常食にも EW を使い続けていました（写真 19）。

バンガロールに一度戻って三浦さんと合流し、中部カルナータカのベツラーリ県へと北上。ショートカットも兼ね、アンドゥラ・ブラデシュを抜けて向かうことにしました。その途上のアナンタプール県ヒンドゥープールで、二人で手当たり次第に穀物商をあたりましたが EW は見つからず、あきらめ掛けた最後の一家 Shree Geetha Store で、穀象虫に塗れた EW を見つけました（写真 20）。これが私達がアンドゥラで確認する最初の EW になります。

その後、カルナータカのバツラーリ県、ダヴァンゲレ県（数年前にバツラーリから分立）、そしてチットゥラドゥルガ県北部で、多くの EW 畑を実験することになりました。このアンドゥラのアナンタプール県は、カルナータカのトゥンクール、チットゥラドゥルガ、バツラーリ三県とは州境を挟んだ東隣です。恐らく EW の点在分布は、アンドゥラ・ブラデシュ西部をも巻き込み

ながら、帯状に広がりつつビジャプール、グルバルガ、ビーダルなど北部カルナータカの諸県にまで至る事は確実と思われます。今回ビジャプールを訪れた際、幸運にもEWを確認することができました。それは今のところ、私たちが確認したインドにおける「北限のEW」ということになるでしょうか（写真21）。しかし北部カルナータカは、薄弱なEW栽培の帯がその北のマハラシュトラー州を貫き更に北のマディヤ・プラデシュ州に至る、旅の途中に過ぎないのかも知れません。

グジャラート地方のインダス文明について－覚え書

小磯 学（神戸夙川学院大学）

インダス文明の研究は、ハラッパーやモヘンジョ・ダロなどこの文明を象徴する大規模な都市遺跡の発掘調査から始まった。必然的に出土資料の種類や量も多く、これがそのままインダス文明のイメージを形作っていくことになる。その後の今日に至るまでの研究は、アメリカ隊のハラッパーの調査に代表されるようにこうした都市遺跡から得られる情報の質と精度を高めていくとともに、同時にまた小規模な遺跡にも目を向け、相互のネットワークに根ざした総体としての文明のしくみを明らかにすることにあったといえる。この課程で明らかになった事実のひとつが、文明内部の地域性でもあった。

インダス文明の南東部に位置するグジャラート地方は、この文明の核地域と考えられるシンド地方のインダス川中流域、あるいはパンジャブ地方のガッガル・ハークラ川中流域からやや離れた独自の地理的環境にある。ただしインダス文明が栄えていた当時にガッガル・



図1 グジャラート地方の地理的環境

ハークラ川の水が下流まで流れていたとすれば、グジャラート地方はその河口に接していることから核地域とは陸路だけでなく河川によっても密接な結びつきが保持されていたであろう。

このグジャラート地方では、前4千年紀末から前2千年紀半ば頃にかけてハラッパー文化（インダス文明）以前、ハラッパー文化、ハラッパー文化以後と大きく3つに区分できる時期に各地に諸文化が展開し、現在540箇所以上の遺跡が確認されている。ここではインダス文明をめぐるグジャラート地方の実情について簡単に振り返っておきたい。

■地理的背景と遺跡の分布

まずグジャラート地方の地理的環境について確認しておく、大枠で以下の4つの地方にまとめることができる。

i) カッチ地方：グジャラート地方北西部に位置する、北と南がそれぞれ半年間海水に覆われる大ラン湿原とアラビア海とによって挟まれた島状の土地である。その北西側に連なるシンド地方と同様に非常に乾燥しており、300～400mmに過ぎない年間降水量はモンスーン期の80～90日に限られる。年間を通じて水の流れる川がなく、石灰岩や砂岩からなる多くは平坦な土地であるが、北部を中心に最高で標高425mの山並みが見られる。また随所に見られる玄武岩の露頭は、インド半島部から連なるデカン・トラップと呼ばれる玄武岩台地の北西端にあたる。これはメノウ系の準貴石を産出する源でもある。

今日では、このような環境にも適応した雑穀のひとつである夏作物のトウジンビエ（バージラー）の栽培とウシやラクダを対象とした牧畜（遊牧）が主要な生業となっている。

ii) 北グジャラート地方：カッチ地方の東方に広がる大・小ラン湿原の東岸に位置し、砂丘や砂質の土壤が広がる土地である。年間降水量は350mm以下で、トウジンビエが主要作物であるがその生産性は低く、やはり牧畜も重要な生業となっている。東方のアラヴァリ山地からはバナース川、ルーベン川などが小ラン湿原に向かって流れ出るが、水があるのは雨季のみである。

iii) サウラーシュトラ半島：アラビア海に面した直径およそ380kmのほぼ円形をなすサウラーシュトラ（カーティアワール）半島。年間降水量は500～750mmで、半島中央部から四方に流れ出る小河川は、その水量の差が乾季と雨季とで大きいものの、年間を通じて水流を有している場合が少なくない。またこれらの河川沿い

を中心にデカン・トラップ特有の黒色綿花土が堆積し、カッチ地方に比べると土地は肥沃である。一部で標高1000mに達するような山地が各地に点在する。主要作物はやはりトウジンビエとモロコシ（ジョワール）である。モロコシは基本的に夏作物であるが、この地方では冬季に栽培することもあるという。綿の栽培も多い。

またサウラーシュトラ半島が本土と接する北東部に広がるナール低地は、19世紀の初頭までは雨季のたびに半年間にわたって水で覆われ、その間は半島全体が巨大な島のように本土から分離されてしまっていたという。ただし現在では沖積土の堆積が進みこうした現象は起きない。このナール低地のさらに南端に連なるのがパール地帯で、やはり雨季には広い土地が水で覆われるが、水がひく10月頃に種をまくことで灌漑せずにコムギを栽培することができる土地となっている。ここに位置するロータルやラングプルなどからはコムギの出土は確認されていないものの、これらの遺跡が築かれた背景にはカッチ地方や北グジャラート地方とを結ぶ交通の要所であるという点だけでなく、何らかの形でこうした自然環境も要因となっていたと思われる。

iv) 南グジャラート地方：グジャラート地方の南東端に位置するマヒー川からナルマダー川とタープティー川の河口にかけて広がる平野部で、西側のカンパート（キャンベイ）湾と東側に南北に連なる一部で標高1000mとなる山地とに挟まれた土地である。この地方にも黒色綿花土の堆積が見られ、年間降雨量は1000mm以上とグジャラート全体でもっとも高い。今日ではモロコシとともにイネが主要な作物になっているほか、ここでも牧畜が重要な生業となっている。

■遺跡の分布と年代

ここでは以下の3つの時期に大きく区分して、遺跡の分布を概観しておきたい。それぞれの年代については、現状ではあくまでも便宜的なものである。

【ハラッパー文化以前～前4千年紀末～前2600年頃】

近年の大きな成果のひとつが、グジャラート各地で発見されたハラッパー文化以前に遡る在地の諸文化の存在である。ただしそれぞれを特徴づける土器が発見されている遺跡は現状ではいずれも数箇所を過ぎず、地理的に非常に限られている。

i) アナルタ土器：カッチ地方東部のドーラーヴィラー1期やまた北グジャラート地方のナーグワダIA期やカーンメールなどのいずれも遺跡の最下層から発見された白色彩文などによって特徴づけられる一群の土器。一部はシンド地方のアムリ土器やコート・ディジー土器と

も比較されている。とくに北グジャラート地方の場合にはアナルタ土器（伝統）とも呼ばれており、伸展葬のほか壺を用いた2次葬など西方のバローチスターン地方との関係を窺わせる文化伝統でも知られている。またその後半の時期には、スールコータダーIA期などで見られるように、土器全体に占める割合はわずかとなるものの一部でハラッパー文化と共存する。

ii) プレ・ブラバース土器：これまでサウラーシュトラ半島南端に位置するブラバース・パートン（ソームナート）の最下層のみから発見されている櫛描文や厚手の鉢などを特徴とする土器。時期的にも限られており、上層で登場しハラッパー文化と共存するブラバース土器とも関連をもたないまま入れ替わるように消滅してしまう。

iii) パードリー土器：サウラーシュトラ半島東端に位置するパードリーの最下層のみから発見されている手捏ねで厚いスリップや白色彩文を特徴とする土器。北グジャラート地方の土器との類似性が指摘されており、詳細な比較検討が課題となっている。

iv) 雲母混入赤色土器：ロータルの最下層でハラッパー土器と共判して発見されたもので、胎土に雲母の薄片を多量に含むことを特徴とする。在地の土器とされているが半球状鉢など（ソーラート・）ハラッパー土器と共通する器形が目立ち、独立した文化といえるかは疑問が残る。

上記の土器文化の発見によって、グジャラート地方の各地が早くから開拓されていたことが明らかとなったことが大きな成果である。前3千年紀半ばにハラッパー文化が登場すると、プレ・ブラバース文化のように消滅してしまうものがある一方で、アナルタ文化のように共存をしていくものがある。それはハラッパー文化がどのようなプロセスをへてグジャラート地方に進出したかを物語っており、より詳細な比較検討が今後の課題といえる。

【ハラッパー文化：前2600年頃～前1700年頃】

この時期はさらに前2100～1900年頃以前と以後で、ハラッパー文化前期・後期と大きく区分して考える必要がある。ここでいうハラッパー文化前期とはインダス文明の最盛期を含み、グジャラート方面への最初の進出が試みられたカッチ地方にドーラーヴィラーやデサルプル、スールコータダーなどを初めとする20箇所ほどの集落が築かれた時期である。おそらくはわずかに遅れて、サウラーシュトラ半島北縁辺部の円弧状の地域にロータル、ラングプル、クンターシー、ナーゲーシュワールなどが築かれていった。

カッチ地方はシンド地方の影響が強い地方であること

は事実とはいえ、前述したように一部でハラッパー文化以前からつづく土着の文化との共存が認められ、シンド地方でもなくサウラーシュトラ半島でもない、特徴をもった独自の地方として把握する必要がある。

またとくにカッチ地方とサウラーシュトラ半島北縁部のクンターシー、ゴラ・ドロ（バガサラ）、ジャイダク（ピタル）などの集落では、小規模でありながら石灰岩や日干しレンガを積んだ堅牢な周壁が築かれていたことが大きな特徴といえる。外敵への単なる防御だけでなく、権威の象徴といったシンボリックな機能もあったのかもしれない。

とくに検討を要するのは、サウラーシュトラ半島へのハラッパー文化の展開のプロセスについてである。半島の北東部に位置するラングブルの1950年代の発掘に基づき設定されたラングブル編年によって、ハラッパー文化前期（RGP IIA 期、IIB 期）、ハラッパー文化後期（IIB 期ないし IIC 期）から輝赤色土器文化（III 期）に至る変遷が明らかにされた。これがグジャラート地方全体においても基準となる編年として位置づけられてきた。ところがこの編年はその後、それぞれの時期をどこで線引きし区分するかに関して異なる解釈が度々出され、混乱を生んできた。これに伴い、とくにサウラーシュトラ半島における時期ごとの遺跡数の変化も、ハラッパー文化前期からハラッパー文化後期にかけて「急増する」とされたり「激減する」とされたり、まったく逆の見解が出されるという奇妙な現象さえ生んでいる。

そうした要因のひとつに、540 箇所以上確認されているグジャラート地方の遺跡のうち実際に発掘されたのがおよそ 10%に過ぎず、その多くも断片的な情報しか伝えられていないという事実がある。その他の 90%の遺跡の帰属時期もわずかな表採資料に基づき判断され、その結果のみが伝えられているのが現状である。このようにこれらの時期区分と時期ごとの分布の変遷についての記述は、根拠がきわめて曖昧といわざるをえない。

この問題に密接に関わるのが、サウラーシュトラ半島中央部に位置するロージュディーの発掘調査で提唱された「ソーラート・ハラッパー」文化である。これはこの遺跡で確認された（シンド地方に代表される）ハラッパー土器に酷似した一群の土器の帰属年代が、放射性炭素測定によればハラッパー文化前期と同時期の前 2600 年前後に遡ると算出されたことに端を発する。これは同時期でありながら、シンド地方とは異なり土器の大半を半球状鉢が占めること、淡黄色土器や胎土がきわめて粗い粗製土器などを伴うこと、彩文の文様構成がシンプルであることといった固有の特徴を有するために、ハラッ

パー文化内の地域的なヴァリエーションとして位置づけ解釈するものであった。これに従って上記のラングブル編年やサウラーシュトラ半島全域の時期区分も、ソーラート・ハラッパー文化の解釈に合わせた修正案が示されてもいる。いずれにしても、こうした特徴の一部は南グジャラート地方などを経て輝赤色土器や東方のデカン高原の金石併用諸文化にも受け継がれていくと思われ、ハラッパー文化と後代の諸文化やさらには歴史時代にまで至る編年を確立していく上でも重要な検討課題となる。

ソーラート・ハラッパーに関しての解釈の要は、前述したようにこれがハラッパー文化前期と同時期とした点にある。ただしこれは放射性炭素測定の結果のみを根拠とするものであり、土器を初めとする出土遺物の編年学的な詳細な比較検討は明確になっていない。サウラーシュトラ半島に展開したハラッパー文化（に関連する土器）の独自性は、この地方の調査が着手された 1930 年代にすでにこれをハラッパー文化の後期とするものと指摘された経緯がある。出土資料のほぼすべてがソーラート・ハラッパーからなる遺跡が現状ではロージュディーのみということもあり解釈が先行したきらいがあるが、いずれが正しいのか、新たな資料を加えた慎重な再検証が急務となっている。

一方で、ラージャスターン地方のアハール文化が起源地とされる黒縁赤色土器のサウラーシュトラ半島やカッチ地方への進出の問題がある。最近ではこの文化も前 3 千年紀初頭ないしそれ以前にまで遡るとされており、一部でハラッパー文化前期段階に共存が見られる。とくに半球形の鉢など黒縁赤色土器とソーラート・ハラッパー土器とで共通するものもあり、東西の広域におよぶ直接的な物的・人的交流を物語る。こうしたグジャラート地方全体のハラッパー文化の成立や維持の検証については、現在進められているカーンメールやシカルプルなどの成果も大きな役割を果たすことになる。

最後に生業についても触れておく。グジャラート地方は、ハラッパー文化が展開した前後に一部がアフリカ起源の夏作物の雑穀であるシコクビエやキビ、アワなどが南アジアにおいて初めて積極的に栽培された地域にほかならない。これとウシを中心とした牧畜とがセットとなり、現在のインド中部にも継続して見られる乳の利用を行う農牧文化圏を形成していった。現状では確証はないものの、ソーラート・ハラッパー文化において卓越する半球状の鉢も、こうした生業とも関連して固有の料理に対応して用いられた銘々器のようなものだった可能性もある。牧畜を重視した点はシンド地方やパンジャブ地

方のハラッパー文化でも共通するが、これらの地方では基本的に冬作物のコムギに基盤を置いていた点に地域的な相違を生んだ要因のひとつがあったと考えられる。

【ハラッパー文化以後：前1700～1400年頃】

基本的にはラングプルで発見された輝赤色土器の出現をもってハラッパー文化の終焉とみなす。分布についてはカッチ地方からも数箇所の遺跡が報告されているほかは、大部分が北グジャラート地方、サウラーシュトラ半島西部と東部、南グジャラート地方それぞれの限られた地域に集中して分布が見られる。西方のシンド地方との結びつきは希薄となるが、一方で輝赤色土器はわずかながらネワーサなどデカン金石併用諸文化の遺跡からも発見されており、また共存する黒縁赤色土器が増加傾向にあるなど東方のインド半島部やラージャスタン地方とを結ぶ重要な役割を果たしたと思われる。

■まとめにかえて

インダス文明がグジャラート地方に進出した第一の目的は、インダス川平原部にはない石材を初めとする各種資源の獲得であったろう。ロータルで発見されたペルシャ湾式印章が物語るように、以前にくらべ限定的とはいえ、少なくとも前2000～1800年頃まではペルシャ湾岸方面との海洋交易も継続していたようである。また正確にいつどのように雑穀が導入されたかはまだ詳細は不明であるが、その新たな土地の開拓の中で夏季を生育の季節とする新しい穀物との出会いもあった。そしてそうした諸々の活動は、土着の文化やより東方の文化(の人々)との共存のもとに成り立っていたことが窺える。各地方ごとに、さらに各年代ごとにその実態の詳細を解明していくことが今後の課題にほかならない。

参考文献

- ・ Herman, C.F. (1997) 'Harappan' Gujarat: The Archaeology-Chronology Connection' *Paleorient* 22(2): 77-112.
- ・ Possehl, G.L. and C.F. Herman (1990) 'The Sorath Harappan: A New Regional Manifestation of the Indus Urban Phase' In M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1987*, Rome, IsMEO. pp.295-319.
- ・ Possehl, G.L. and D.P. Mehta (1994) 'Excavations at Rojdi 1992-93' In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia. pp.603-613.
- ・ Sonawane, V.H. and P. Ajithprasad (1994) 'Harappa Culture and Gujarat' *Man and Environment* 19(1-2): 129-139.
- ・ Varma, S. (1990) 'Changing Settlement Patterns in

Kathiawar' *Studies in History* 6(2): 139-161.

・ Varma, S. (1991) 'Villages Abandoned: The Case for Mobile Pastoralism in Post-Harappan Gujarat' *Studies in History* 7(2): 279-300.

インダスの土器 ハラッパー式土器 (2)

上杉彰紀 (総合地球環境学研究所)

前回は、考古学における土器研究の意義とインダス文明期の土器であるハラッパー式土器の研究の現状についてまとめた。今回は、具体的にハラッパー式土器がどのような特徴をもつのかまとめることにしたい。

ハラッパー式土器と総称されるのはインダス文明の時代に消長した土器様式の一つである。厳密に定義されたことはないのだが、モヘンジョダロ遺跡とハラッパー式土器で出土した土器資料をもってハラッパー式土器と呼ぶのが一般的であるが、インド・パキスタン分離独立後の考古学調査の進展によって、インダス文明の広がった範囲がかつて考えられていたよりも広いことが明らかになるとともに、各地にモヘンジョダロ遺跡やハラッパー遺跡で出土する土器とは異なる土器様式が存在することが明らかになった。そうしたハラッパー式土器とは異なる土器様式がハラッパー式土器と共存して一つの遺跡から出土するのが特にインダス文明の縁辺地域(シンド・パンジャーブ西部地域を中核地域とみなすならばだが)において一般的な状況であることがわかってきたのである。

しかしながら、ここで問題となったのは厳密な意味でハラッパー式土器とは異なる土器を明確に地域の土器として捉える視点が稀薄であったことである。シンド・パンジャーブ地方に共通する土器の存在を重視するあまり、地域の土器伝統についてはあまり注意が払われなかったのである。確かに、ある特定の地域に特徴的な土器を抽出する研究視点も存在したが、インダス文明研究におけるそうした地域的土器様式の意義を積極的に問う研究は、先インダス文明期からポスト・インダス文明期への一貫した在地土器様式としての展開を説いた Y.D. Sharma のハラッパー式土器の研究を除けば、ほとんどなかったといっても過言ではないであろう (Sharma 1982)。

1980年代にグジャラート地方の調査を進めた G.L. Possehl は特にロージディー遺跡の調査成果にもとづ

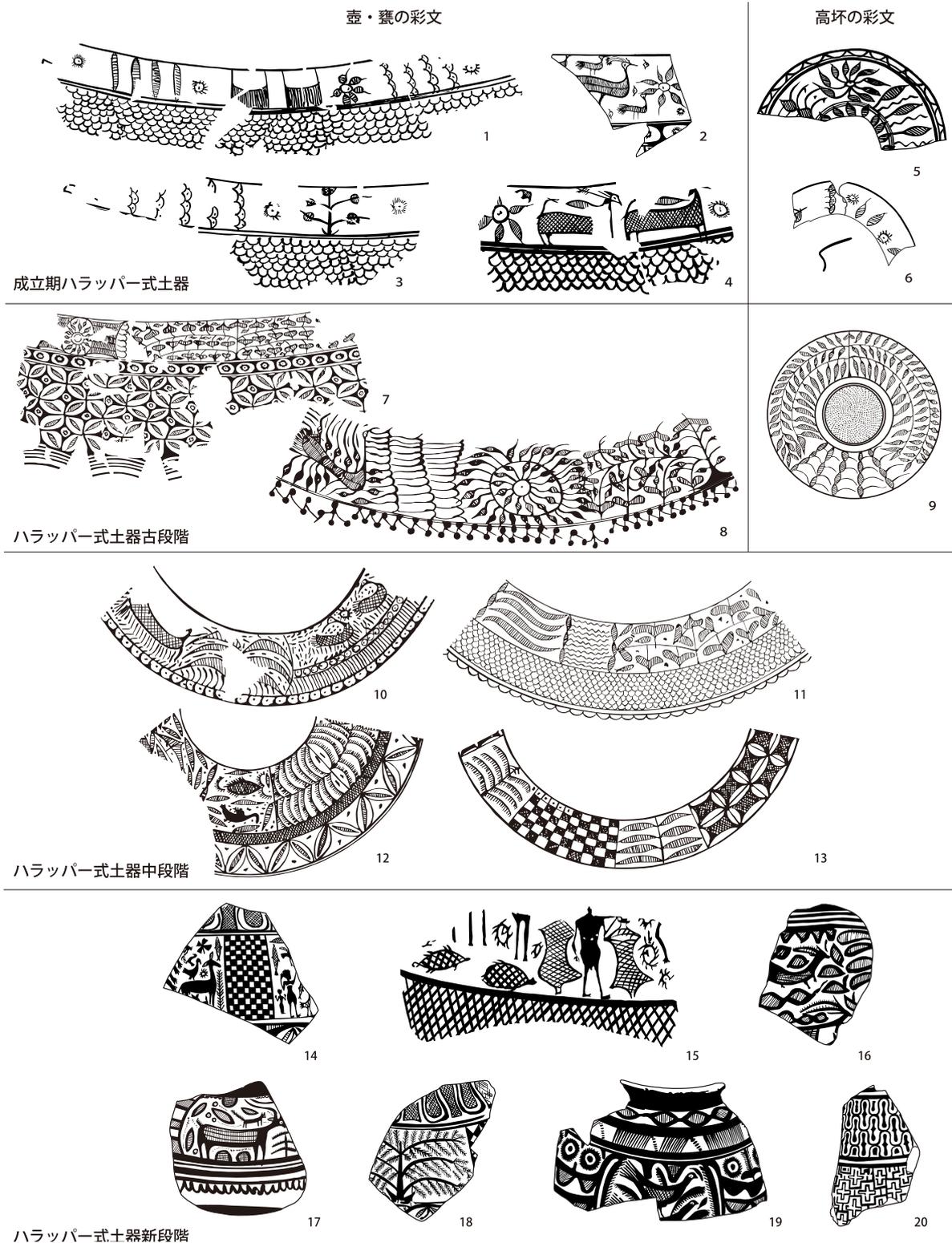


図1 ハラッパー式彩文土器の変遷試案 (上杉・小茄子川 2008)

いてソーラト・ハラッパー式土器という地域様式の存在を指摘したが、ソーラト・ハラッパー式土器についてもその定義は曖昧であって、土器様式としての構造を解き明かすまでにはいたらなかった。こうした土器資料の扱いに潜在する曖昧性は結局、厳密な意味でのハラッパー式土器と各地の土器様式との関係に対する理解を滞らせることになったのである。ハラッパー式土器の分布がイ

ンダス文明社会の広がり把握する上での一つの手掛かりとされている研究の現状からみれば、ハラッパー式土器とは何かという厳密な定義が求められることはいうまでもないであろう。

一つの遺跡から出土する土器を分析する上において、そこにどのような特徴をもった土器が存在するのか、それらがどのように生産され、遺跡の中で消費されたのか、

その背景に潜む歴史的・社会的意味は何なのか理解を進めていくためには、体系的な分類研究が不可欠であり、分類群に対する明確な定義が求められるのである。

* * *

ハラッパー式土器は彩文土器と無文土器から構成されている。これは彩文の有無を基準にした大分類である。ハラッパー遺跡ではハラッパー文化期の全出土土器のうち彩文土器が占める割合は3～4%であることを踏まえると (Jenkins 1994: 321)、明らかに特別な土器として無文土器と作り分けがなされており、それはすなわち使用時の彩文土器に対する特別な意味づけが存在していることが推測できる。逆に無文土器は極言すれば大量生産・消費される土器と理解することができる。ここから彩文土器と無文土器という大別がハラッパー式土器の様式的構造を理解する上で意味のある分類であるといえるだろう。

彩文が施される器種についてみると、大形甕とS字形長胴壺が中心であって、それに高杯や壺が若干量伴う。文様の種類にも複雑な形象文や幾何学文を描いたものから単純な平行線文までさまざまであり、一概にはいえないものの、複雑な構成をとる文様は大形の甕や長胴壺が一般的であり、小形の器種には単純な平行線文が描かれることが多い。彩文土器の特別性という視点からみれば、複雑な彩文構成と単純な平行線文ではその土器様式のなかにおける意味は大きく異なるとみるべきであろう。

J.M. Kenoyer さんのご教示によれば、ハラッパー遺跡ではハラッパー文化期の古い段階に相当する3A期に複雑な文様構成をとる彩文土器が多く、3B期から3C期にかけて平行線文のみあるいは無文の土器が増加するという。一方、モヘンジョダロ遺跡ではその比率こそ不明であるものの、文明終末に近い時期にも独特な彩文土器が出土している。一つの文明社会の中においても彩文土器の時間軸・空間軸上における差異が存在している可能性を物語っており、そうした差異を把握し、文明期の土器様式の変遷を明らかにしていくことが求められよう。

図1はフランスの考古学者 G. Quivron さんの研究成果 (Quivron 2000) を土台にして、小茄子川歩さんと協力して作成したハラッパー式彩文土器の変遷試案である (上杉・小茄子川 2008)。4つの段階に大別したが、上から順に追っていくと彩文の要素と構成が変化していくことがわかる。成立期のハラッパー式土器では大形甕の肩部に設けられる主文様帯の中に文様要素が並列的に

配置されている。それが古段階になると、文様帯全面を埋めるようにクジャク文やピーパル文が描かれるようになる。図2に示したラーキー・ガリー遺跡出土の彩文土器 (Vivek Dangi さんの所蔵品を筆者が図化したもの) でもS字形長胴壺の頸部に設けられた文様帯を埋めるようにピーパル文を中心とした彩文が描かれている。細かく描き込まれた彩文は彩文土器が特別につくられた土器であることを物語っている。中段階になると、基本的な構成は古段階に共通するものの、文様要素が変形したり文様の描出が粗雑になる。主文様帯に幾何学文が充填されるようになるもの前段階からの変化である。全体的に古段階よりも彩文が簡略化されたり形骸化する様子を看とることができる。新段階になると、複数の動物と植物を組み合わせたたり人物を挿入したりする風景文が登場する。また、中段階にも比して幾何学文が目立つようになる。

これはあくまでも現有資料を最大限に評価して提示した一案にすぎないのだが、彩文に時間の経過に伴う変化のある可能性を十分に示している。古段階までに成立した精密かつ複雑な彩文様式は文明期中頃には形骸化し、後半期には古段階とは似ても似つかない彩文様式へ

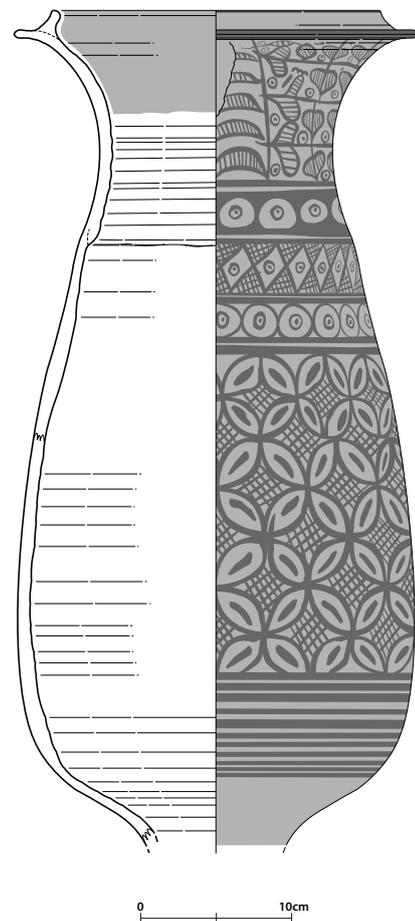


図2 ラーキー・ガリー遺跡採集のハラッパー式彩文土器 (Vivek Dangi 所蔵資料)

と変貌する。上に述べたように、彩文土器がハラッパー式土器様式の中で特別な意味をもった土器であるとするならば、その変化はインダス文明社会そのものの変化を一端にせよ反映している可能性が高い。筆者は新段階における変化の背景にバローチストーン高原南部に展開したクッリ式土器からの影響を考えている（近藤・上杉・小茄子川 2007）。

こうした特徴をもった彩文は文明期を通じて他の土器様式に描かれることはない。北東部のガッガル川流域に展開したソーティ・シースワール式土器には明確に異なる彩文様式が存在し、グジャラート地方に展開したアナルタ式土器やソーラト・ハラッパー式土器には幾何学文や平行線文のみであって、ハラッパー式土器にみられる形象文は描かれない。すなわち、ハラッパー式土器に登場する彩文はハラッパー式土器に独特のものである。ここに同じ文明期に展開した土器様式群とはいっても、ハラッパー式土器と他の土器様式との間に厳然たる差異が存在していることが理解できるであろう。ハラッパー式土器の彩文の変遷を明確にすることは、ハラッパー式土器と他の土器様式との差異を把握する一つの手段である。

現在のところ彩文土器が最も明瞭に変化を追うことのできる資料である。実際には無文土器においてもさまざまな時間的あるいは空間的变化が指摘されつつあるが、文明初期から終末までの変化を追うことができる資料には乏しいのが現状である。膨大な層位的資料が蓄積されているハラッパー遺跡の報告を期待するところである。

今回は、ハラッパー式土器をひとまず置いて、先インダス文明期に消長したさまざまな土器様式について概観することとしたい。それはとりもなおさずハラッパー式土器の成立を考える上で重要な作業である。

引用・参考文献

- ・ Jenkins, P.C. (1994) 'Continuity and Change in the Ceramic Sequence at Harappa', in A. Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Suomalainen Tiedeakatemia, Helsinki. pp.315-328.
- ・ Sharma, Y.D. (1982) 'Harappan Complex on the Sutlej (India)', in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Recent Perspective*. Oxford & IBH, New Delhi. pp.141-165.
- ・ Quivron, G. (2000) 'The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan' *East and West* 50(1-4): 147-190.
- ・ 上杉彰紀・小茄子川歩 (2008) 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察-彩文土器の編年を手掛りとして-」『西アジア考古学』第9号、101-118頁。

・ 近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩 (2007) 「クッリ式土器とその意義-岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて-」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』21、15-50頁。

考古学 GIS 班の調査経過 (2008 年度) 報告

寺村裕史 (総合地球環境学研究所)

山口欧志 (国際日本文化研究センター)

宇野隆夫 (国際日本文化研究センター)

■ 調査の経過

インダスプロジェクト考古学 GIS 班は、2009年2月4日から同3月2日にかけて、インド・ハリヤーナー州ファルマーナー遺跡と、グジャラート州カーンメール遺跡において、本年度に実施した発掘調査成果の高精度記録をおこなった。用いた方法は、トータル・ステーションを用いた測量・図化、および写真測量であり、すべてのデータに世界測地系経度・緯度および標高値を付与している。またこの期間中に富山大学理学部・地球物理学班と協力して、両遺跡で遺跡探査と考古地磁気調査を実施した。

■ ファルマーナー遺跡

1. 墓の写真測量

墓エリアでの調査では、墓遺構を70基近く検出した。写真測量による記録は、検出した遺構のうち、掘削が完了した遺構のすべてを対象とした。また、未発掘の遺構については、トータル・ステーションを用いてプランのみを記録した(図1)。今回実施した写真測量により、墓遺構の規模・主軸方向、墓坑深さ・墓に副葬された土器の配置、人骨の埋葬形態などを、3次元デジタルデータとして記録することができた。

2. 住居エリアの写真測量

前項にて報告した墓エリアの東南東約900mの位置に、住居遺構や道路遺構から成る住居エリアが確認されている(図2)。また、墓エリアと住居エリアの間において、地表面で採集される多量の土器などの遺物は、墓エリアと住居エリアの間にも、遺跡が展開していた可能性を示唆する。

住居エリアでの調査では、発掘調査の面積が広く、検出遺構すべてを記録することは現実的ではなく、かつ昨年度の遺構プラン図が既に作成されているため、今回はいくつか遺構を絞って、火処や大型の土器を床面に埋め

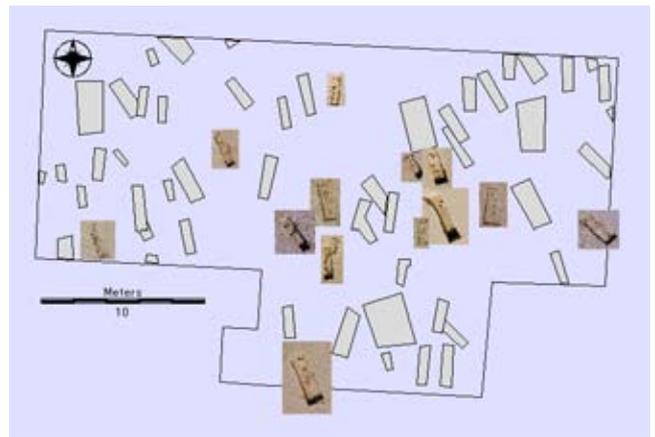
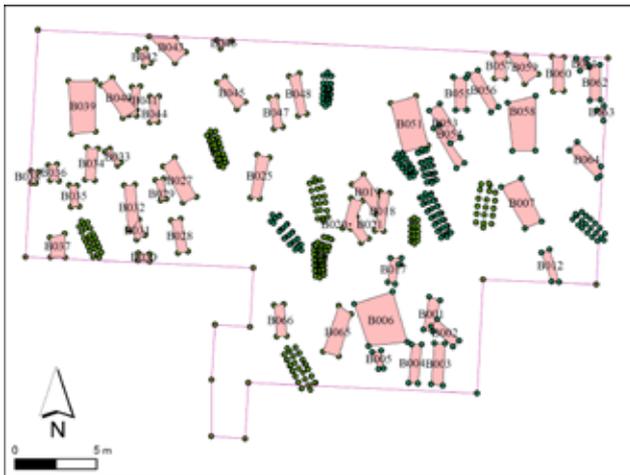


図1 ファルマーナー遺跡：墓のプラン図（左）と写真測量（右）

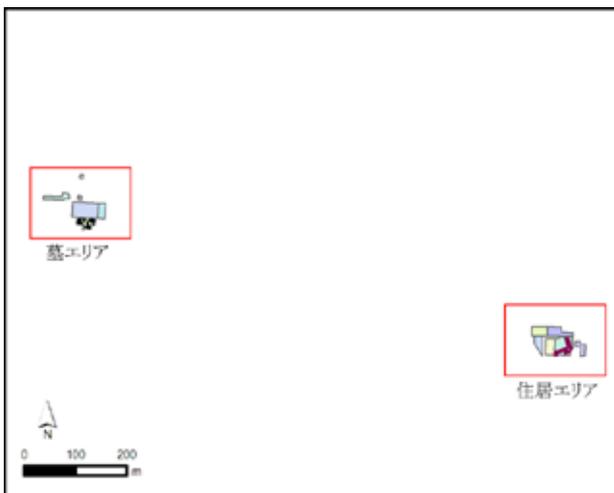


図2 墓と住居エリアの位置関係



図3 住居エリア：遺構の写真測量（オルソ画像）



図4 カーンメール遺跡：東壁の写真測量



図5 北壁の写真測量

込んだ住居址など特徴的な場所の写真測量を行った。そのうちの 하나가図3であり、中央やや右上の土が赤く焼けた箇所では、考古地磁気の分析のためサンプルを採取している。

■カーンメール遺跡

1. 城壁の写真測量

今年度カーンメール遺跡の調査においては、城塞の東側と北側で前年度までに確認されていた城壁を、面的（平面・立面とも）に追うかたちで調査区を拡げ、長さ



図6 中央地区の遺構プラン図

30mほどに渡って壁面を検出した。そこで、図4・5に見られるような壁面の写真測量を行った。一連の城壁のつながり具合や石積みの様子がよく分かる。図4・5の両写真ともにオルソ補正をしているため、従来通りの石積みの立面図を作成する場合には、そのままトレースすればよく、写真測量は現場での作業時間の大幅な短縮となった。

2. 遺構プランの作成

さらに、カーンメール遺跡では、遺跡の中央地区において広い面積の発掘を実施した。この発掘結果について垂直方向の写真撮影をおこなうことが困難であったため、トータル・ステーションによる測量と図化をおこなうこととした。すなわち発掘された主要な遺構について、その上場と下場の主要なポイントについてトータル・ステーションを用いて三次元位置データを取得し、これに基づいてGIS上で住居の壁や床面や通路などの遺構の単位毎にポリゴンを作成して、重ねて表示した(図6)。

なお中央地区以外でも、西側城壁において発掘調査がなされたため、中央地区と同じ方で、記録をおこなっている。

■ 結び

考古学GIS班は、インダスプロジェクトの発掘調査成果のすべてについて共通した時間情報と空間情報を取得して、GIS上で管理・分析を実施することを目標として作業を進めている。現在、作業量の問題から、すべてのデータをデジタル形式で記録することは困難であるが、紙ベースの記録にもデジタルデータと共通する位置データを与えて、GISデータとして使用できるようにしている。

この作業によって、城壁・建物・墓など遺構の規模や方位や配置など、発掘調査成果について、従来よりもはるかに正確な情報を取得することができるであろう。またこれによって各種の遺物や動物・植物遺体を含む環境情報が、遺跡内にどのように散布し、遺構配置とどのように関わるかをGIS上で分析することが可能となる。

今後、このような作業をさらに進めることによって、インダス文明遺跡においてどのような人の営みがなされたか、また人と環境・資源とがどのように関ったかについての解明を進めていきたい。

ウィスコンシン大学南アジア学会に参加して

上杉彰紀(総合地球環境学研究所)

去る10月17日～19日に、アメリカ・マディソンにあるウィスコンシン大学にて第37回南アジア学会が開催された。500人を超す参加者があり、考古学から現代政治学にいたるさまざまなセッションが設けられた。考古学の部会に参加し、アメリカにおける南アジア考古学の現状に触れることができた。

考古学部会への参加者は30人程度と必ずしも多くないが、毎年南アジア諸国の研究者が招かれ、当地の研究者との交流を深めている。今年はインドからR.S. ビシュトさん(元インド政府考古局副長官)、R.S. フォーニアーさん(同発掘・踏査・出版局長)、V.S. プラバーカルさん(同アウランガーバード支局研究員)が参加し、最新の研究成果について発表された。

ビシュトさんはグジャラートにあるドーラーヴィーラー遺跡の発掘調査で知られるインド考古学界の重鎮である。これまでもさまざまな学会、研究誌にてドーラー



写真1 インダス考古部会会場の様子



写真2 ケノイヤーさんの説明を受けるビシュト博士とフォーニア博士

ヴィーラー遺跡の調査成果について発表されているが、今回は同遺跡出土の印章について発表された。150点ほどの印章が初期ハラッパー文化期からハラッパー文化期にかけて出土しており、モヘンジョダロ、ハラッパーに次ぐ多さの資料を提供している。層位ごとに印章の時間的変化を追うことが可能で、これまで十分に明らかにされてこなかった印章に関する情報が提示された。

フォーニアさんはこれまでほとんど調査の手が及んでこなかったヒマラヤ山脈西部での調査成果について発表された。ヒマラヤ山脈がインド世界とチベット、中央アジアをつなぐきわめて重要な役割を果たしていたことが報告された。インダス文明の時代にもヒマラヤ山脈と平原部の交流関係が存在したことは、ブルザホーム遺跡の調査で明らかにされていたが、改めて山間地域の重要性が浮き彫りにされた。

ブラバカルさんはドーラーヴィーラー遺跡出土のビーズおよびビーズ穿孔用ドリルについて分析を進めており、その成果について発表された。マイクロスコブを用いた観察結果とドリルの遺跡内での分布の検討を通して、遺跡内におけるビーズ生産の実態に迫ろうとするもので、分析方法およびその結果は近年のインド人研究者による研究の質の高さを示している。

ドーラーヴィーラー遺跡については、ウィスコンシン大学人類学科教授 J.M. ケノイヤーさんと博士号を取得したばかりの R. ロウさんが、ビシュトさんやブラバカルさんらインド人研究者との共同研究を進めている。その分析・研究は緒についたばかりだが、膨大な知見がもたらされることは間違いないであろう。

このほかウィスコンシン大学の博士課程の学生を中心とした研究発表が行われ、着実にアメリカにおける南アジア考古学研究の層が厚くなっていることを実感した。私もインダス・プロジェクトによるファルマナー遺跡

の発掘調査成果について発表する機会を与えられた。

言語研究グループセミナー

「文明と文字：記憶 vs. 記録」

大西正幸（総合地球環境学研究所）

今年の3月14日、言語研究グループは、熊本大学にて、熊本大学社会文化研究会との共催で、「文明と文字：記憶 vs. 記録」と題するセミナーを開催しました。インダス文字を含めた南アジアの「文字」の問題を取り上げ、文字による伝承と口承文化との関係に焦点を当てることを主眼としたセミナーで、「インダスプロジェクト言語研究会」のメンバーである長田俊樹、児玉望、北田信の3名が、それぞれ専門の立場から講演を行いました。

セミナーでは、大西の趣旨説明のあと、まず長田俊樹さんが、地球研およびインダスプロジェクトの概要を説明し、発掘の現状や、発見された遺物や遺構、特にインダス文明期の印章や封泥、土器に刻まれた文字など、新たに発見された文字資料の紹介をしました。

続いて、児玉望さんが、「非文字説と文明の継承—インダス「文字」 解読の動向」という題で、パルポラやマハデヴァンのドラヴィダ説やファーマーの非文字説など、インダス文字をめぐる最近の研究の動向について紹介し、それぞれの説の長所と短所をまとめました。そして、後半では、インドの文字文化は、歴史的変化が早く、なかなか統一した文字体系が確立しなかったこと、文字が後代の人々に忘れ去られたり、地域毎に著しい分化が見られるたりするなどの特徴があることを論じました。そしてこれらの現象の背景には、口承文化が主体で、文字による固定化を好まない、インド文化の根強い伝統があるのではないか、と結論づけました。



写真1 長田さんの発表の様子

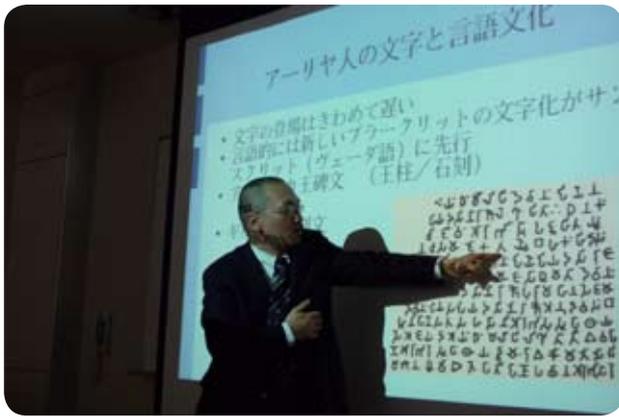


写真2 児玉さんの発表の様子



写真3 北田さんの発表の様子

最後に、北田信さんが、「放浪者の言語—音声テキストと文字テキストの伝承」という題で、ベンガル地方の放浪詩人であるパウルの文字に頼らない口承文化と、ネパールのネワール人たちの、写本を頼りに伝承されるチャチャー歌の伝統を論じました。そして、どちらの伝承も、10-13世紀のタントラ仏教歌「チャリヤーパダ」にまで遡ること、パウルの伝承は、共通の内容、共通の比喩を用いながらも、時代や場所によって異なるテキストを創造しているのに対し、チャチャー歌はもはや意味を失った化石化したテキストとして伝承されていること、等を指摘しました。最後に、北田さんが現地です習得した、門外不出の歌の実演まで入り、熱気にあふれた講演となりました。

言語研究グループによる、地球研を離れてのセミナーは、これが初めての試みでしたが、3つの講演を通して、南アジアの文字文化の古代から現代に至る流れがまとまったイメージとして浮かび上がる興味深い内容となり、メンバー外の聴衆からも熱心な反応を得ることができました。小規模なセミナーながらなかなかの成功だったと言えると思います。

メンバーとしては、今後も、年に一度はこのような催しを開催したいと考えています。

インダス・プロジェクト発掘調査報告会 2009

5月29日にインダス・プロジェクト発掘調査報告会が開催された。2008年度に行われたインドの2遺跡の発掘成果報告に加え、パキスタン考古局局長のF.D. カーカル (Kakar) 博士をはじめとするインド、パキスタンの考古学調査に関する幅広い発表が行われた。

報告会では、まず長田プロジェクトリーダーによる趣旨説明が行われ、次にカーカル博士により「パキスタンにおけるハラッパー文化の考古学的調査」と題し、その歴史と現況が丹念に語られた。

次にデカン大学 (インド) のV. シンデ (Shinde) 教授により「2008年度ファルマーナー遺跡発掘調査」と題し、広範囲に及ぶ住居址や墓群の発掘成果について報告された。次いで国立遺伝学研究所の斎藤成也教授により「ファルマーナー遺跡の古代DNA分析の可能性」と題し、2008年度に同遺跡の墓を実際に訪れた時の調査結果と今後の古人骨DNA抽出の可能性について語られた。今年度は遺跡より出土した牛の骨からまずDNAの抽出を試みる予定とのことである。

ラージャスターン・ヴィディアピート大学 (インド) のJ.S. カラクワール (Kharakwal) 教授からは「2008年度カーンメール遺跡発掘調査」と題し、検出された住居址や城壁、出土遺物などの発掘成果について報告された。

昨年に引き続き、2008年度に外国人研究員として地球研に滞在されていたマハーラージャー・サヤジラオ大学 (インド) のP. アジートプラサード (Ajithprasad) 教授から「2008年度シカルプル遺跡発掘調査」と題し、発掘成果について報告された。今年度の調査では当プロジェクトからは宇野教授をはじめとする物質文化研究グループから数人調査に参加し、写真測量や地中レーダー



写真1 F.D. カーカル博士

探査を行った。

2007年度に外国人研究員として地球研に滞在されていたシャー・アブドゥル・ラティーフ大学（パキスタン）のQ.H. マッラー（Mallah）教授からは「シンド地方ハークラ川下流域における考古学調査の進展」と題し、同大学で実施しているタール砂漠での踏査と発掘調査の成果が報告された。

以上が発表内容であるが、翌日に開催されたラウンドテーブルの発表者の方々も多数参加していただき、興味深い指摘やコメントを多数寄せられた。昨年度で発掘調査も終了したということもあり、例年以上に有意義な報告会であった。（遠藤 仁）

ハーヴァード大学・地球研共催ラウンドテーブル

5月30・31日にハーヴァード大学と地球研長田プロジェクト、佐藤プロジェクトとの共催で「第13回ハーヴァード大学ラウンドテーブル 南アジアと中央アジアにおける民族集団の形成 (Ethnogenesis of South and Central Asia (ESCA))」が開催された。農耕の拡散や家畜化、考古学、言語学、遺伝学といった様々な視点をテーマとしたもので、2日間4セッションに分かれて日本、インド、アメリカ、オーストラリア、フィンランド、台湾から第一線で活躍する研究者を集めてのラ

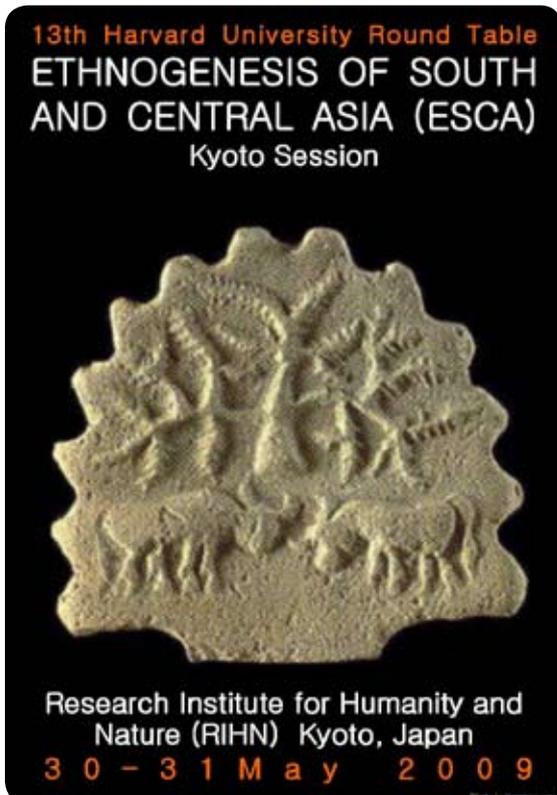


写真1 M. ヴィツェル博士



写真2 R. メドウ博士

ウンドテーブルであった。各発表の内容は以下のとおりである。

1. アジア、特に南アジアにおける農耕と家畜の拡散

- ・佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所）：趣旨説明
- ・楨林啓介（総合地球環境学研究所）：長江流域の稲作文化は1つではない
- ・細谷葵（総合地球環境学研究所）：農耕民の野生植物利用—稲作社会の多様性についての一考察
- ・S.A. ウェーバー（ワシントン州立大学）：インダス文明における農耕戦略—新たな栽培植物、地域性および気候適応化
- ・竹井恵美子（大阪学院大学）：大きく異なる2つのミレット—アジアの *Setaria italica* と *Spodiopogon formosanus*
- ・R. メドウ（ハーヴァード大学）：南アジアと東アジアにおける家畜の拡散

2. ハラッパー考古学における最近の動向

- ・上杉彰紀（総合地球環境学研究所）：趣旨説明
- ・J.M. ケノイヤー（ウィスコンシン大学）：墓地の構成、層序および編年—ハラッパー遺跡の調査から
- ・B. ヘンフィル（カルフォルニア州立大学）：ハラッパー遺跡—南アジアの人類史における青銅器時代文明の人々



写真3 ラウンドテーブル参加者

の役割

- ・V. シンデ (デカン大学) : 前3-2千年紀のガッガル地方およびカッチ地方における埋葬行為—その分析
- ・P. アジートプラサード (マハーラージャー・サヤジラオ大学) : グジャラート地方におけるハラッパー文化期の埋葬

3. 南アジアとアラビア湾岸の交流—インダス文字の問題を含めて

- ・長田俊樹 (総合地球環境学研究所) : 趣旨説明
- ・S. ファーマー (文化類型研究会) : 「インダス文字研究の崩壊」論の5年後—古代ユーラシアにおける文字をもたない文明
- ・D. ボッツ (シドニー大学) : 前3千年紀後半の4つの世界—ウル・シマシュキ・メルッハ・マガン
- ・A. パルポラ (ヘルシンキ大学) : ハラッパー文化、ドラヴィダ語およびインド・イラン語における野生アジアロバ

4. インドにおけるコムギの多様性と言語多様性—DNAと言語の多様な世界

- ・佐藤洋一郎 (総合地球環境学研究所) : 趣旨説明
- ・笹沼恒男 (山形大学) : アフガニスタンの在来コムギの遺伝的多様性とその栽培の将来性
- ・巖新富 (台湾自然科学博物館) : 台湾の魯凱族が営む農業の生物多様性の伝統的管理
- ・M. ヴィツェル (ハーバード大学) : ヒンドークシュ山脈とパミール高原における言語多様地域—栽培植物の語彙

発表者を含め50名ほどの会であった。なお、この会の内容はハーヴァード大学から出版されるとのことである。(遠藤 仁)

発掘調査報告書作成に関わる協定締結

インドで行ってきたファルマナー遺跡とカーンメール遺跡の発掘調査は昨年度で終了し、今年度以降は報告書作成を進めます。そこで、2009年6月1日に長田俊樹教授とデカン大学のシンデ教授、ラージャスターン・ヴィディアピート大学のカラクワール教授との間で発掘調査報告書作成に関わる協定が締結されました。2011年刊行予定の両遺跡の発掘調査報告書の作成に向けて、より一層の連携が求められています。(遠藤 仁)



写真1 協定締結の様子

編集後記

この4月から新たに地球研に入りました。いろいろと不慣れでご迷惑をお掛けすることも多いと思いますが、よろしく願います。

最後になりましたが、今号にご寄稿くださった方々に篤く御礼申し上げます。(遠藤)

インダス・プロジェクト ニュースレター 第5号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹
編集・発行 インダス・プロジェクト
発行日 2009年6月30日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>